

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00752

研究課題名（和文）持続可能な社会形成をめざす住生活文化に関する教育の実践的研究

研究課題名（英文）Practical Research on Education on Living Culture to Create a Sustainable Society

研究代表者

妹尾 理子（Seno, Michiko）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：20405096

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、住生活文化に焦点を当て、持続可能な社会の構築につながる教育の創造をめざした。具体的には、若者の住文化理解に関する実態や教科書記述内容の調査、住文化に関連する国内外の社会教育施設の調査を行い、その結果をもとに教材や授業の開発を行った。開発教材や授業は中学校の家庭科で実施し、授業中の生徒の発言、ワークシート記述、授業後の教員アンケートの結果等からその効果を検討した。その結果、生徒の興味・関心を高め、深い学びとなっていることが成果として得られた。また、教員志望の大学生と共に地域の野外民家博物館を視察し、小学生が社会科見学等で活用できるワークシート教材を開発することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は住文化に関する教材と授業の開発を目的として行ったものである。単に文化の理解や継承をめざすだけでなく、持続可能な社会をつくるという視点を意識している点に独自性があると考えている。持続可能な社会の構築という視点は、家庭科の学習指導要領にも記載されるなど、あらゆる教育に求められていることから、本研究成果は今後の教育実践の質向上に貢献するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research, we will focus on the culture of housing and living, and create education with the aim of building a sustainable society. First of all, we conducted a survey on the actual situation of young people's understanding of living culture and the contents of textbooks. Next, we conducted a survey of social education facilities in Japan and overseas related to housing culture. Based on the results, teaching materials and classes were developed. Teaching materials and classes were provided at home economics. We examined the effects of these measures based on the statements made by students during classes, the descriptions in worksheets, and the results of teachers' questionnaires after classes. As a result, it was found that students' interest was increased and they learned a lot. Another achievement was the study tour of a local open-air folk house museum and the development of teaching materials that can be used by elementary school students for field trips.

研究分野：住居学，家庭科教育，ESD

キーワード：住教育 住文化教育 家庭科 教材開発 授業開発 ミュージアム（博物館） ESD

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展の中、伝統的生活文化への理解や継承は地域づくりとも関わって、社会的課題となっている。また、教育界では ESD (持続可能な開発のための教育) の推進も求められており、住生活に関する学びにおいても文化をとりあげることが「持続可能な社会の構築」という視点からも不可欠である。

筆者らは、これまでに住まい・住環境に関するリテラシーの育成を重視し、教材開発やカリキュラム開発に取り組んできた。そのキーワードとしては「環境共生」「地域づくり」「安心・安定」等があり、研究成果として、家庭科カリキュラムや教材の開発を行うことができ、学会発表や講演、家庭科教科書や資料集の執筆などの形で、社会にも発信することができた。しかし、住まい・住環境に関わる課題は今もなお各地域に存在し、少子高齢化や産業の不振、価値観の変化等を背景に、伝統的な生活文化は失われつつあり、子どもたちの生活経験も貧弱になっている。

しかし、地域の伝統的な住まいや暮らしから学べることは多様であり、伝統的生活文化の学びは、暮らしやものを大切にすることの価値観形成にもつながり、地域づくりへの貢献や環境問題への対処、自立した生活者の育成にもつながっている。東日本大震災においても、地域のつながりや伝承が災害時に活かされた例などの報告がある。人々が住まい・住環境の課題に主体的に取り組む上でも、生活文化を理解し、次世代に継承、発展させていくことは意義あることといえる。

これまでに取り組まれた住生活文化に関する研究としては、例えば、碓田ら(2007)が、地方都市での住文化継承の活動について実態調査を行いまちづくりと関連付けて述べている。また、田中ら(2009)も、民家再生と地域住文化の伝承に関連して調査を行っている。奥田ら(2010)は小学生の伝統的住生活に関する経験の調査を行い、住文化を教育で扱うことの重要性を指摘している。しかし、いずれも住文化を伝える重要性については述べているが、具体的に効果的な教育内容や方法の提案、実践による検証まではされておらず、今後は具体的な教材開発や授業実践とその有効性の検証が求められる。

2. 研究の目的

本研究では、住生活に関する生活文化に焦点を当て、単なる継承としてではない持続可能な社会の構築をめざした住文化教育の創造に向けて、実践的研究を行う。具体的には、実態調査をふまえて住生活文化に関する有効な教材および教育内容・方法の開発を行い、実践による効果の検証を行い、成果を幅広い分野に向けて発信する。

3. 研究の方法

(1) 若者の伝統的住文化に関する知識・理解の実態調査を行い、分析・考察を行う。調査内容は日本の伝統的な住居に関する知識の実態についてであり、写真に名称をあてはめる、言葉と意味内容を結び付けるなどである。

(2) 教材教材としての伝統的な住まいやまちなみの可能性を探るために、国内外の伝統的な住まいやまちなみに関する保全状況と教育的取り組みの現状を視察し、子どもたちが住文化について学ぶ場としての可能性を探る。さらに、身近な施設において活用可能な教材を開発し、開発した教材を施設に提供し、子どもたちの学習の支援につながるものとする。

(3) 日本の小学校における住文化に関する教育の現状を把握するために、小学校全教科の教科書を調査し、住文化に関する記載内容を抽出し整理する。

(4) 中学校家庭科住生活分野において、住文化の視点を取り入れた教材・授業について研究・開発し、実際に中学校で授業を行い、その有効性を検証する。

4. 研究成果

(1) 若者の伝統的住文化に関する知識・理解の実態について地域による違いの有無を検討するため、若者に対するアンケート調査を実施し集計を行った。調査内容は、伝統的住まい内部の名称や建材・建具に関すること、畳に対するイメージや経験を問うもの、説明文や写真と住まい関連単語を結びつけるような調査も含むものであった。調査の結果、中学生から大学生まで、日本の住文化に関する知識や理解が十分でなく、教育内容や方法について検討する必要があることがわかった。東京と地方の大学生に同じ住文化に関する実態調査を行った結果を分析したところ、東京と地方という異なる地域にある大学間であっても結果に大きな違いがみられないことも確認でき、床の間やいろりなど、大人にとっては当たり前のものであっても理解していない若者が増加していることがわかり、住文化教育の必要性を確認することができた。

(2) 日本の小学校における住文化に関する教育の現状を把握するために、小学校全教科の教科書から、住文化に関する記載内容を抽出し整理した。その結果、小学校においては国語の物語文や説明文、社会の地理や歴史分野、家庭科の季節に応じた住まい方の学習、音楽科での挿絵や写真、図工、理科、算数、体育の教科書においても、住文化に関する言葉や文章、写真やイラスト等が見られ、さまざまな教科学習の中で住文化を扱う機会があることがわかった。小学校は担任の教師が授業を行うことが多いことから、教師自身の住文化に対する知識や理解を深めることで、子どもたちの関心をもち、理解を深める学習が可能であると考えられる。

(3) 教材としての伝統的な住まいやまちなみの実態を探るために、国内の各地方に残る伝統的な住居やまちなみと関連する博物館などの社会教育施設を訪ね、子どもたちが住文化について学ぶ場としての可能性を探った。具体的には、国内では、内子町(愛媛県)、倉敷美観地区、早

島町（岡山県）竹中大工道具館、住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」、奈良町、京町家、川崎民家園、江戸東京たてもの園、昭和館、下町風俗資料館、四国村などを訪問し、伝統的住居やまちなみ保存の状況、資料館の展示内容などを調査した。その結果、伝統的住居やまちなみの再生は各地で進んでおり、わかりやすく魅力ある展示の工夫等が見られた。定期的にイベントを開催して、伝統の技術について体験を通して学ぶような取り組みも見られた。また、解説シートや資料からは、情報提供のあり方や子どもたちに関心を持ってもらうための工夫についてもさまざまな示唆を得ることができた。

国外においては北欧フィンランドとスウェーデンで野外建築博物館の視察を行い、多くの伝統的住居や暮らしの展示内容や教育プログラムの事例を調査した。海外の事例では、高齢者を対象にした「回想法」といえるようなプログラム事例もあり、今後の教育内容や方法を構想する上での示唆を得ることができた。

最終年度には、各地の展示内容や学習シートを参考に、教員志望の学生に対し、住文化に対する知識・理解を深めるための座学ののち、大学近くにある伝統的住居を移築展示している施設を学生と共に視察した。その後、施設を利用する小学生を想定した学習用教材（ワークシート）の開発を行い、開発した教材は施設側に提供し、社会科見学等で今後活用される予定である。

また、日本国内でのエコミュージアム活動について、既存の住民意識調査を改めて分析・考察した。その結果、住民のエコミュージアム活動が、自分の住んでいる地域の住文化に対する理解を深めるものであること、住民の地域への愛着心の醸成やソーシャルキャピタルの高まりに対して寄与することがわかった。

（４）学校教育における住文化に関する教育としては、実践的な研究を行うことができた。これまでの調査研究をもとに、日本の住文化を学ぶには、実際に手で触れることや、体験することができる教材が必要であるとの知見を得た。そこで、地元の職人に教育のねらいを説明し、畳やふすま、障子などを、素材は質の高い本物を使用したうえで、教室等に持ち運びやすい小さいサイズでの製作を依頼した。具体的には、図１のような精巧にできた教材畳等で、畳の内部は昔ながらのわらでできたものと、近年多くなったスタイロフォーム（発泡ポリスチレン）木質ボードの３種類のミニサイズとした。また、建具の敷居や鴨居を理解しやすいように、実際に開け閉めできる障子と襖の入った建具を、持ち運びできるサイズで製作していただいた（図２）。これは障子が雪見障子になっており、なめらかに上下する見事なつくりであった。

以上の教材を用いて、中学校技術・家庭科（家庭分野）において、住文化の学びに環境の視点に関連付けた授業展開を学校現場の教員とともに探った。授業において、ミニサイズの畳や建具を教材として用いることで、自然素材の肌触りや吸湿性等の長所、職人の技術の高さ、持続可能な材料とは何か等を実体験しながら学び考えることができ、中学生の住文化への興味・関心を高めることができた。担当教員の話からも、新たな住教育教材として有効であると確認することができた。使用したミニサイズの畳は、研究活動後、地域の中学校に提供し、今後も使っていただけることになった。また、さらに別の視点からの授業も計画・実施することができた。高齢者理解と住文化理解の両面から深める学びである。中学校家庭科教員と共同で行い、調べ学習・グループ討議・体験等を通して和室と洋室の住まいの特徴を理解しながら、高齢期の望ましい住まい・住まい方等について生徒同士で討議する内容とした。授業の後、生徒のワークシート記述から、高齢期の住まいに対する授業前後の考えの変化を分析・考察した。その結果、和室と洋室の特徴を理解したうえで、高齢者の求める住環境について深く考えた様子が伺えた。以上の学習により、ライフスタイルにふさわしい住環境や住文化への生徒の関心・知識・理解の高まりが確認でき、開発授業および教材の有効性が確認できた。

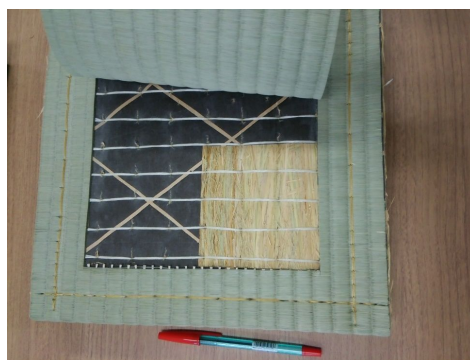


図１：中が見える教材用畳の一部



図２：教材用建具（8分の1サイズ）

<文献>

- 1)碓田智子, 西岡陽子, 岩間香, 増井正哉: 祭礼住文化の継承の視点からみた住まいとまちづくりに関する研究、住宅総合研究財団研究論文集 33 巻, 2007
- 2)田中勝, 西山久子, 早川亜季: 民家再生による住み方の変化と地域住文化の伝承, 住宅総合研究財団研究論文集 36 巻, 2009
- 3)奥田千尋, 碓田智子: 日本の住文化を伝えるための住教育に関する研究 - 小学生のいる家庭における伝統的住文化の継承実態と保護者の住意識 - , 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2010

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林文香・妹尾理子	4. 巻 7
2. 論文標題 大学生の伝統的住まいに対する理解と家庭科教育の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島女学院大人間生活学部紀要	6. 最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林文香・妹尾理子
2. 発表標題 大学生の伝統的住まいに関する理解の現状と教育の可能性
3. 学会等名 日本家政学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 妹尾理子
2. 発表標題 中学校家庭科教員グループと大学教員との協働による住居領域の授業研究 - 自主研修会の成果と課題についての考察 -
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2019年度例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuoki Ohara
2. 発表標題 Creating Sustainable Community and Heritage through Ecomuseum: Trial Discussion on Strengthening, Local People's Attachment and Social Capital through Museological Actions in Community
3. 学会等名 Eleventh International Conference on the Inclusive Museum "Museums, Heritage & Sustainable Tourism", 7-9 November 2019, Buenos Aires, Argentina (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池下香・妹尾理子
2. 発表標題 住文化への関心・理解を深める中学校家庭科の授業開発
3. 学会等名 日本家庭科教育学会第61回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 妹尾理子
2. 発表標題 小学校教科書に描かれる住文化に関する内容-住文化教育の充実に向けた基礎研究として -
3. 学会等名 2017年度日本建築学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本家庭科教育学会編、荒井紀子・工藤由貴子・赤塚朋子・河村美穂・高木幸子・池下香・妹尾理子他23名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 143頁(102-107頁分担)
3. 書名 未来の生活をつくる - 家庭科で育む生活リテラシ -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	大原 一興 (Ohara Kazuoki) (10194268)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授 (12701)	

